

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）大学院学生研究2015 年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	日本文学	専攻
研究代表者 (2016 年 3 月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏 名		
	文学研究科・日本文学専攻・博士課程後期課程 1 年		仲井眞 建一 印		
指導教員	所属・職名		氏 名		
	日本文学・教授		石川 巧 印		
自然・人文・社会の別	自然	・ 人文	・ 社会	個人・共同の別	個人・共同 名
研究課題	政治化された〈遺骨〉からみる文学				
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2016 年 3 月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年		氏 名		
	文学研究科 日本文学専攻 博士課程後期課程 1 年		仲井眞 建一		
研究期間	2015 年度				
研究経費 (1 円単位)	(支出金額) 173,249 円 / (採択金額) 200,000 円				

研究の概要 (200～300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

戦後、戦死者を取り巻く状況において、「国に殉じた」死者として、その弔いに国が介入するような死者が出現した。特に沖縄においては遺骨回収の問題から、その遺骨に対し国家の力が働いた。沖縄と本土における弔いの文化の違いからなる行き違いも見え、そうした文化や政治の力が集約する場所として、遺骨というものがある。本研究では、文学の中にあらわれる遺骨を焦点化し、そこにどのような力が働いているかを研究するものである。遺骨がいかに政治化されてきたか、そこに働く所属や国籍、また死者の気持ちや思想までも同定しようとする、ナショナリスティックな力の働き方を検討していく。具体的には、又吉栄喜「ギンネム屋敷」、崎山多美「水上往還」、目取真俊「風音」を中心に検討していく。特に「ギンネム屋敷」には「朝鮮人の骨」が描かれており、本研究の中心となる。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[遺骨] [慰霊] [沖縄]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

調査した作品は主に一九八〇年代を背景に描かれた作品である。戦後、慰霊が問題化された年代でもある。佐藤卓巳『増補 八月十五日の神話 終戦記念日のメディア学』筑摩書房 平成二六年一二月 (※初出 平成一七年七月) によれば一九八〇年代、「政治・経済の国際化の波」のため「歴史記念日を利用した国民統合のアイデンティティの再編」が、日本に必要とされていた。「戦没者追悼の日に関する懇談会」の報告書に従い、八月一五日の正式名称を「戦没者を追悼し平和を祈念する日」とした。また沖縄遺族連合会編『いそとせ』(財団法人沖縄県遺族連合会 平成七年一二月)と大田昌秀『沖縄戦没者を祀る慰霊の塔』(那覇出版社 昭和六〇年六月)によれば、「沖縄」では昭和二九年、北海道が県外による初めての慰霊碑「北霊の塔」を建立したのを皮切りに続々と慰霊碑が立ち始め、昭和五六年の時点で全国の慰霊碑が出そろっていた。上杉和央「那覇から摩文仁へー復帰前沖縄における「慰霊空間の中心」一」『二十世紀研究』第七号(二十世紀研究編集委員会 平成一八年一二月)や北村毅『死者たちの戦後誌 沖縄戦跡をめぐる人々の記憶』(御茶の水書房 平成二一年九月)が指摘しているように昭和三五年頃から、観光産業として巡礼者や観光客のための「戦死者の死のナショナルな意義を強調する語り」が行われていた。以上の事からも慰霊塔や慰霊碑が、沖縄、本土の複雑な思惑の元に絡み合い、戦没者の死をナショナルなもの、国家の帰属意識に収斂していくための物語を生み出していったことがわかる。そのような背景のなか、提出されたのが、又吉栄喜「ギンネム屋敷」、目取間俊「風音」、崎山多美「水上往還」なのだ。

現在の日本国土において硫黄島に続き地上戦が行われた沖縄では、二〇万にも上る死者が出た。そのあまりに膨大な数のため、戦後六〇年あまりを経た現在でも未だ戦没者の遺骨は回収され続けている。沖縄遺族連合会編『還らぬ人とともに』(財団法人沖縄県遺族連合会 昭和五七年二月)によれば、終戦直後は道路脇、畑の中、畦道、石垣の側、暗渠内、壊れた家屋の下、岩陰等、そこら中に遺骨が散乱していた。特に激戦地であった旧真和志村では、村長金城和信と村民によって回収された遺体が、一所に集められ、昭和二一年、魂魄の塔が建立されたそう。これが戦後初の慰霊塔である。昭和二九年、北海道が、県外による初めての慰霊碑、北霊の塔を建立したのを皮切りに続々と慰霊碑が立ち始め、昭和五六年の時点で全国の慰霊碑が出そろった。現在までに三三〇余り(当局にすら把握できないほど)の夥しい慰霊碑が建立されている。乱立する慰霊碑に、そしてその多様性に、その数に見合わず、遺骨のほとんどは遺族の元に帰ることはなかった。戦争によって破壊された遺体の身元確認は困難を極め、そのほとんどが無名戦没者となっていたからだ。摩文仁の国立沖縄戦没者墓苑には一八万もの遺骨が祀られているが、それらは全て身元確認の出来なかった「無名戦没者」のものである。

こうして多様な戦死者――民間人・日本兵・アメリカ兵・そして臣民、例えば「朝鮮人」のような――は一様に「国に殉じた」「無名戦没者」となり、個別の死は平板な戦死へと回収される。ベネディクト・アンダーソン「想像の共同体」の議論を引きだすまでもなく、これら「無名戦没者」の慰霊塔、慰霊碑には「国民的想像力」が満ちており、その下に眠っている名もなき者の「国民的帰属(ナショナルリティ)を明示する必要」はまったくない。その下に眠っているものは当然、その国の人間である。それは国家と国民との結び付きを自明のものとする。その国の兵士の墓がどうして国民でないことがありえようか、というわけだ。またマリタ・スターケンは、ベトナム戦争記念碑を分析しながら、その「スクリーン」の役割に注目している。「何かを隠したり映し出す機能」を記念碑がもつという指摘で、「物事を隠すかわりに、支配的な物語を提示し、かつ膨大な記憶や個人的な解釈をも映し出す」と述べる。正確に言えば、慰霊塔、特に初期の慰霊塔は集骨施設、いわば墓所としての役割が強く、記念碑とは必ずしも言えないのであるが、それが集団の骨を安置することにより、「無名戦没者」を象徴する役割を担ってしまった。そして慰霊塔は「スクリーン」となり、国民以外の骨の存在を考慮に入れない。これは富山一郎が言うような「ナショナルな「語り」、つまり戦没者の死を全て国家に回収し「均質なナショナリズム」の論理へと収斂する「支配的な物語」といえるだろう。

研究成果の概要 つづき

又吉栄喜「ギンネム屋敷」はそういった状況に、「朝鮮人の骨」を対置する。「ギンネム屋敷」は、「おじい」の娘である「ヨシコー」が、ギンネムの林の奥に住んでいる「朝鮮人」にレイプされたとして、「私」「勇吉」「おじい」の三人が脅迫に向かうという物語である。そこで「朝鮮人」は「私」にだけ、自分の恋人「小莉」を殺してしまった経緯を語るのである。「朝鮮人」は「小莉」殺害後、死体を庭先に埋めるのだが、土に埋まっているその「骨」が「小莉」のものかどうか「朝鮮人」はわからなくなってくる。確認すれば良いのだが、「朝鮮人」は「今更掘り返してみたってどうしようもありません」と諦めている。なぜなら「もうすでに穴の中の小莉は白骨になっているはず」で、そうになってしまえば、もう区別はつかないからだ。そして「朝鮮人」の語りは、今作られているという、慰霊の塔へと移っていく。

……あなた方は骨といえば、沖縄住民のか、米兵のか、日本兵のか、としか考えませんね、じゃあ、何千何百という朝鮮人は骨まで腐ってしまったのでしょうかね。
……だが、考えようによっては、朝鮮人の骨は幸福かもしれません。正体がわからなくなるんですから。ちゃんと慰霊の塔、近頃つくられはじめているようですが、その塔に納骨してくれるんですからね。ただ、中で、朝鮮人の骨と日本兵や沖縄人の骨がけんかをしていても、将来、この塔を訪れる人達は日本兵と沖縄人の骨に花束を、黙禱を捧げるでしょうね、永久に……。 (略) 【p30 上】

「朝鮮人」は、無名戦没者という骨の総体に、「朝鮮人の骨」という名前を与え分節化することにより、日本と沖縄とが共同で作り上げようとしたナショナリズムの物語に対して異議を唱える。「朝鮮人の骨」の存在自体が日本と沖縄が作り上げる国家と国民との関係に混乱を呼び起こし、「日本兵と沖縄人の骨」に捧げられた「花束」や「黙禱」の、欺瞞を露呈させる。つまりここには「正体がわからなく」なった「朝鮮人の骨」が、正体を自明とされた「日本兵や沖縄人の骨」と「けんか」することによって、ナショナリズムへの強烈な否定が突きつけられていると言ってもいい。しかし、ここで注意してもらいたいのは、「朝鮮人の骨」が「日本と沖縄とが作り上げようとするナショナリズムに対して異議を唱えるもの」であることは確かだが、それは単に「日本」「沖縄」の物語に対して「朝鮮」という新たなナショナリズムの物語を提示して混乱させているのではなく（それでは新たにナショナリズムを再編しなおせばいい）、空白、「正体不明」になった「朝鮮人の骨」を提示し、ナショナリズムの物語に疑義をはさんでいるということだ。つまり「朝鮮人」の語りは単に、所属が自明とされた「無名戦没者」の骨に、異物としての「朝鮮人の骨」の存在を示唆しただけではない。「骨まで腐ってしまったのか」と、それが忘れさられ「沖縄人」や「日本人」の物語に回収され、またそこから排除されたこと、慰霊塔に納められたあらゆる骨が「ナショナル」な「語り」によって均質化され、空白となったことを指摘しているのだ。「朝鮮人の骨」がナショナルな物語によって空白化、なかったことにされることで、その暴力性が露わにされる。そして注目したいのはそのことを指摘する「朝鮮人」も「小莉」を表象しようとして失敗するということだ。なぜなら「朝鮮人」もまた空白を示すに際し、「小莉」を「朝鮮人の骨」へと安易に回収しているからだ。そして「小莉」はさらなる空白を突きつける。「小莉」は「女」の幽霊としてあらわれる。ここに至って、もはや「小莉」という存在さえも消し去りかねない危うい地点にまで「女」は向かい、あらゆる物語を徹底的に拒否する。ここにおいて「ギンネム屋敷」は「小莉」だけでなく、あらゆる犠牲者を、「土の下にいる」者たちを呼び出す。「小莉」という固有名詞が、姿かたちもわからない「骨」になってしまったとき、その暴力にさらされたとき、その引き換えに呼び出されているのは、あらゆる暴力にさらされ、固有名詞を抹消された「土の下にいる」者たちの存在である。

このように、政治的状況とそれに絡み合う文学にあらわれた「骨」や「慰霊」が、それらすべてに疑義をつきつけ、破壊していく力を有していくのだ。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

仲井 眞建一 又吉 栄喜「ギンネム屋敷」論 ――「悲鳴」としての「握りこぶし」
『立教日文』二〇一五年七月 一五ページ～二八ページ

④ その他

立教日文大会「崎山多美「水上往還」論」